世紀転換期の通商立国論——明治期南進論再考——

三牧聖子

はじめに——明治期南進論の「再発見」

「戦前日本の発展史」という言葉からまず想起されるのは、日清・日露戦争による領土拡張、朝鮮や台湾の植民地経営、大東亜戦争期の南進政策といった、一連の帝国主義的膨張政策である。そのためともすると戦前日本の発展史は、帝国主義的進出の歴史に矮小化される傾向にあった。こうした傾向に対して入江昭は、近代日本には貿易や航路の発達、移民や留学生の海外渡航のような「平和的膨張」というもう一つの発展史が存在してきたという問題を提起した。[1] このとき入江が、近代日本に連綿と存在してきた平和的膨張論の有力な例証として挙げたのが明治期南進論であった。

大東亜戦争中に「南方建設の先駆者」として「発見」された経緯[2]から昭和期南進論の序曲に還元される傾向にあった明治期南進論を、「昭和的様相」と「理念型的に対照」[3]される平和的な海外発展論としていち早く評価したのは矢野暢の一連の著作である。[4] 矢野は明治期南進論を、「基本的には善意の思想」で、「軍事力よりは政治の力、強引な侵略よりは平和的な経済進出を考え」、「いわゆる国権論的なアジア主義思想とは遠く離れた地平で唱えられていた」と評価した。[5] 入江や矢野による「再発見」以後、明治期南進論は固有の原理を持った対外思想としての地位を確立し、

その意義と特徴、特に同時期の北進論や、侵略的・武断的性質を帯びていったその後の南進論に比しての平和性を指摘する優れた研究が生みだされていった。

昭和期の「国策的」「侵略的」南進論のイメージの延長から語ることを厳に戒め、その固有の原理を探ろうとした矢野の研究が、南進論研究の重要な端緒となったことは確かである。しかし矢野の描く明治期南進論は、昭和期の「侵略的」南進論に還元されない価値を見出そうとする問題意識ゆえに、逆に平和性を強調されすぎている。矢野は「なんの他意もなく「南洋」について語っただけなのに、無邪気な「南洋」論を国益のために悪用しようとした昭和史の奸計によって、あたかも日本の膨張主義的国策を支えようとした南進思想家であったかのように、政治の祭壇にまつりあげられることになった」[6]明治期南進論者の悲哀を指摘する。しかし矢野自身認めるように、「基本的には善意の思想」であった明治期南進論が、昭和期に南進政策の「先駆者」として「発見」され得たのは、そこに何等かの「危険思想への転化の潜在可能性」が存在したからなのである。[7]ここに再度、明治期南進論者の「平和的」性質を再考する意義がある。

明治期南進論の考察においては、そもそもいかなる思想を「南進論」[8]と呼ぶのか、誰を「明治期南進論者」と見なすか自体論争たり得る。明治期南進論は容易に収斂を許さない多様性に満ちており、その雑多性が明治期南進論の一つの個性でもある。しかし彼等に「共通するいくつかの考え方の癖」[9]があることも事実である。明治期南進論の最大公約数を探る本論文の性質上、考察対象には、矢野が挙げる代表的南進論者[10]に、以降の研究で明治期南進論者としての評価が進められた恒屋盛服や服部徹ら榎本武揚周辺の人脈、杉浦重剛や福本日南ら国粋主義者等を加え、できるだけ広範な論者を含めるよう努めた。[11]

第一節　明治期南進論の「平和的」性質をめぐって

一　脱亜的国際認識――アジア主義との対比

特に議論を呼んできたのは、矢野が明治期南進論を「善意の思想」と評価したことである。[12]近代日本のアジア外交に顕著に見られる「善意」の横暴――独善的な政策をアジアに押し付け、その「善意」を解さない他者への暴力を正当化する――を想起しても、善意か否かを対外思想の評価の指針とすることはナイーブな見解であろう。さらに明治期南進論が同時代の対外思想に比べ「平和的」なものとなったのは、矢野自身、明治期南進論は「アジア主義的な力みかえった「入亜」の姿勢には乏し」く、「すごぶる現実

的な「冷めた外交思想」を奉じ、「みごとに当時の欧米の外交思想と嚙み合いをみせた」と指摘する通り[13]、むしろ国際関係に安易に「善意」のような主観的意図を持ち込まないこと――白人帝国主義に対するアジアの「道義的」連帯といった使命感を語ることを避け、欧米列強の帝国主義秩序の枠組み内で、自らの脆弱な力に見合った自制的な対外政策を追求する――に由来していた[14]。もちろん明治南進論者が、世界に跋扈する白色人種に対するアジア主義的な連帯感情と無縁だったわけではない。菅沼貞風は、「現在にも未来にも吾人の大敵たるべきものは即ち白皙人種なり」、「東洋の勢力を連結し以て白人の跋扈を拒がん」という思想を抱いていた。菅沼が「太平洋の西、印度洋の東、支那海の南、大洋州の北数多の島嶼相群れる中にある」「新版図」を求めたのも、「白人を挫折して其跋扈の気を沮喪せしむる」ためであった[15]。しかし菅沼を若干の例外として、明治期南進論者はアジア主義的感情を即政策に帰結させることはなく、政策としては欧米協調を支持する傾向にあった[16]。「黄、黒、銅色、馬来の諸人種は今日にして自ら計る処無ければ、竟に此世界は白皙人種の専有に帰せん」との危機感から「黄色人種を以て成立する強国の相賛翼連盟」（具体的には日中の「協同連盟」）を説きつつ、この主張に「兼て英国と気脈を通じ以て立国の基礎を鞏固」にすべしという重要な留保つけた志賀重昂の姿勢[17]は、明治期南進論者における、心情としてのアジア主義と、政策としての欧米協調の峻別をよく表している[18]。

明治期南進論者は白人列強との協調を価値として選んだわけではなく、主観的にはアジア主義的な連帯を志向していたとすらいえる。アジア主義者と彼等とを分けたのは、その主観的な感情を現実の対外政策に直結させるか否かにあった。明治期南進論者は、心中に白人への義憤を抱えていようと、国際社会における日本の生存という至上命題に照らし、その道義的可否に関わらず白人列強との帝国主義的協調を選ぶリアリズムを備えていた。かつて入江昭は近代日本外交を、西欧列強を中心とする帝国主義秩序を所与の現実と見なし、その枠組み内で日本の安全と国益を追求した政府の「現実主義」と、アジアの一国として日本がなすべき使命を説き、道義的・感情的な国策を主張した民間の「理想主義」の葛藤として描き出し、西洋の帝国主義の批判に立ったアジア主義が、欧米協調の観点からアジア主義的大義を語ることを避け、慎重な帝国主義外交を遂行した公式の外交政策より侵略的・膨張的な形態をとった逆説を指摘した[19]。明治期南進論とアジア主義との関係は、力と利益を凝視する「現実主義」が抑制的な対外政策を採り、道義を高らかに謳う「理想主義」が際限ない膨張の論理と

なる近代日本外交のパラドクスをよく表している。アジア主義者において、西欧帝国主義への批判意識は、膨張を抑制する視座よりも、日本の膨張に一定の制約を与えていた列国協調を否定し、膨張を解き放つ視座として機能し、彼等が高らかに謳った日本の使命感は国力へのリアルな認識を見失わせ、欧米列強への感情的な反発を解放することになった。明治期南進論者がアジア主義者に比べ「平和的」な対外政策を志向することになったのは、西欧的な「力」の原理に代えてアジア的な「道義」を実現しようとするような崇高な大義を欠き、西欧列強の帝国主義秩序の基本的容認に立ったがゆえであったといえる。

二　海洋立国論——北進論との対比

先行研究において一致を見ているのは、中国・朝鮮への領土拡張的発展を重視した北進論に対し、南進論が四方に広がる「海」に目を向けた通商立国論であった点である。清水元は明治期南進論の特徴を、中国・朝鮮に関心を集中させたリージョナリズムに対するグローバリズムと定式化したが[20]、明治期南進論者の視野は南洋に留まらず、アジア全域、オーストラリア、南北アメリカと世界大に及んでいる。南進論は、四方に開けた「海」への経済的発展を説く開かれた思考であり、その思想の独自性は「「南」進論」より「南「伸」論」であった点に求められるべきであろう。

しかし彼等が、西洋列強による世界分割が着々と進む世界で敢えて政治的・軍事的な「南侵」を斥け、移民・交易などを介した平和的な「南伸」を主張した背景にはどのような国際認識があったのだろうか。それは「帝国の時代」という世界情勢への疎さからくる一辺の理想論だったのだろうか。以下で見るように、南進論者の貿易や移民への志向は、列強による世界分割が進む現状へのリアルな認識に立脚し、脆弱な途上国である日本が「帝国の時代」をいかに生きるかを冷静に熟慮した産物であった。

西洋列強の分割が進む太平洋の現状は、この地に足を踏み入れた日本人に「出遅れた」という焦燥感を強く抱かせた。南洋に足を踏み入れた志賀重昂は、「欧州各国政府は相争ひて軍艦を派遣し、這般諸島の兼併計略の事に周旋せしめ」ている現状を目撃し、「嗚呼斯の南洋多事の秋に際し緩急豈に警する処なかる可けんや」との焦燥感を露にした。しかし注目すべきは、南洋諸島の大部分が既に欧米各国の支配下となり、領土拡張の契機がほとんど望み得ないような状況こそが、南進論者達に平和的・経済的発展を模索させる契機となったことである。志賀は「英国の軍艦が煤煙を燻らし国旗を海風に翻へして宇内到る処の港湾に入り来れば、所在の英国移住民は盛粧炫服して或は馬に跨り

車を駆りて誠実熱心にこれが好来を迎ふるの状況を目撃し、心私に癢痒に勝へざる処あり」という心情を吐露しつつも、「然れども予輩は兼併旨義を懐抱するものに非らず」、「殖民政略を唱導するものに非らず」、「唯海外到る処に我同胞の移住散在して商業を営み農事に服せんことを奨説するものなり」、「海外到る処に商業的の新日本を創造するこそ、汝が今日の急務なれ」と強調したのだった。[21] 榎本武揚が設立した殖民協会の創設以来の会員であった恒屋盛服も、「今の所謂殖民とは兼併拓地の謂ひに非ずして出稼、移住、貿易、漁業等凡そ日本人が糧に海外に依て海外の地に住し生業を営むものを謂ふのみ」、「彼の英語「コロニー」なる文字に翻訳せば或は其裏面に於て人の国土を侵略するの意味をも包含するが如くなれども今や足跡の及ぶ所舟楫の通ずる所名義上悉く諸列強の版図に帰して我旭日旗章を掲くべきの地は南洋中の礁堆か亜弗利加の砂漠中にあらざれば見出す事能わざるに至れり」、「故に其文字は縦ひ兼併拓地を意味するとも実事に至ては之を行う事能はざるなり」[22]との見解を表明した。恒屋の主張は、太平洋を舞台とするテリトリー・ゲームでは西洋列強に太刀打ちできないという諦観が、南進論者に移民や貿易のような、既に西欧に分割しつくされた領域にも進出可能な発展形態を模索させた事情をよく表している。彼等は日本の脆弱な国力、世界分割で列強に大きく出遅れた現実を冷徹な眼差しで見据え、そのような世界で日本が生き抜く現実的方策として移民や貿易といった非領土的発展を支持したのである。

清水靖久は、世界大に推進されていく欧米の帝国主義に呼応して二十世紀転換期の日本で活発化した帝国主義論争を考察し、欧米諸国が帝国主義をとっているという「現実」から即、日本も帝国主義をとるべきだという帰結が導かれたわけではなく、帝国主義は、国際社会で営まれる権力政治の中で、日本はどのような行動をとるべきかという問いに対する「一つの解答」に過ぎなかったと指摘している。[23] 明治期南進論の思想的営為は、アジアが本格的に「帝国の時代」へと突入していく時期にあって、日本国民が一律に領土拡張的帝国主義を採用していったわけではなく、「帝国の時代」を生き抜く術として様々な構想が提起されたことをよく表している。

南進論はほとんど「無主の地」が残されていないという悲劇的な太平洋の現実に対し、自分達の脆弱な軍事力を持って抗おうとも、ただ悲嘆と閉塞感にくれることもなく、「眼」の革命——自分達が世界を見る眼を変える——によって、「海」というゼロ・サム的でない新たな発展空間を発見していく対外思想だった。福本日南や稲垣満次郎ら明治期南進論者に多大な影響を与えた英国の著名な歴史家

ジョン・シーリー（J. R. Seeley）は『英国発展史論（*The Expansion of England*）』で、「英国が地球上で占領した土地は無人の境であ」ったため、「英国人種が海をわたって移住したというだけではなく」「国家の膨張」を伴う移住となったが、「移住が遅すぎ」たドイツの場合、「もう新世界には国家ができ上っていたため、新住民はむりやりに割り込まなければなら」ず「国家を持っては行かない」移住となったと分析した[24]。明治期南進論者の経済的進出論は、もはや世界に「無主の地」はほとんど残されていないが、しかし日本も何等かの形で海外発展していかねばならないという命題に対し、「国家を持っては行かない」発展方法を案出したものだったということができよう。

しかも一度四方の「海」に発展の可能性を見出すならば、植民地獲得競争においては列強に一歩も二歩も出遅れていた日本は、四方の海を媒介に全世界へと開けた最高の立地条件を持つポジティブな存在として立ち現われることになった。列強による世界分割が加速度的に進んでいた当時にあって、福本日南が「我邦土の位地たる太平洋上、西の一涯に在り、西には支那の大国を控へ、北には支比利亜の広土を望み、南は濠州の群島に臨みて、東は亜米利加の南北に対せり、是等の地方は我国四周の海岸何れより発するも旬月にして達するを得べきなり、加之今や一大鉄道ありて東欧を我西面に曳来り、一新運河ありて西欧を我東面に対せしめんとする近きに在り、我邦土已に此の如く至便至要の位地に在り、吾人蒸々四千万、此好位地に住し、豈に之を利用して以て我富実を増進せしめざるの愚日本あらんや、而して之を利用するは則ち大に我海図を恢廓するに在り[25]」と洋々たる未来を語ることができたのは、彼が「海」に自らの活動空間を見出していたがゆえだった。志賀重昂が「パナマ地峡運河の工事成を告げ、欧州各国、米国大西洋岸の諸港より濠州に到る直接の貿易航路を開くの日に当るか、若くは太平洋電線架設竣工の秋に到れば、南洋経済の全局面に絶大の変化を誘致し来り、其関係を被むるものは我日本なり[26]」とパナマ運河開通を歓迎したように、海洋国家として自国を規定し、移民や交易といったトランス・ナショナルな発展方法を採る彼等にとって、太平洋への列強の参入は、自らの活動領域を奪うものであるどころか、太平洋の開発を促進させ、結果的に自分達の活動領域を広げるものとして、望ましいものとすら見なされたのである。

第二節　「南伸」論から「南侵」論への変容をめぐって

一　外在的契機

二十世紀転換期になると、明治期南進論は従来の通商立

国の主張を後退させ、領土拡張主義的な北進論と思想的背景を同じくする「南侵」論へと変容していく。志賀の「南洋時事」（一八九一）から、「探検及び移住の方針」[27]（一八九五）にかけての変化は、その変容を最も劇的に表している。かつては「海外到る処に商業的の新日本を創造するこそ、汝が今日の急務なれ」と訴えていた志賀は、ここでは移住地の候補を、「人民にして弱なり小なる処」である「上乗の移住地」と、「人民にして強盛なり殷富なる処」である「中乗の移住地」に分類する。そして「上乗」への移住は、「（開発の）利益の大半は甲国移住人民に帰し」、「甲は新主人となり、新甲国（甲国が日本なりと仮定せば即ち新日本国）を刱健したるもの、其の甲国に利益する明然」だが、「中乗」への移住は「開発拡大せし利源は畢竟乙土に帰し、真個の実力は主人たる乙土人民の掌握する所となり」、「乙国家は勢力を増殖せし丈け甲国家は其れ丈け消耗せしに過ぎ」ない結果を招くとして、前者の「上乗」への移住を唱導した。「上乗」の候補地は「亜細亜洲にては●●、●●に在り、近南洋にては●●●●群島、●●大島に在り、南洋にては●●、●●●●●群島に在り」と伏字となっている。しかし特定の地域を発展先として名指すその行為が、志賀の視線がもはや万人に平等に開かれた「海」にはなく、「新主人」の座をめぐって争いあう領土にあることを示している。同じ「新日本」という言葉を用いていながら、かつて志賀が世界中に建設せよと謳った「商業的の新日本」と、ここで志賀が唱える「新日本国」の内実との間には別物という他はない懸隔がある。

二十世紀転換期における南進論者の「南伸」論から「南侵」論への変容はどう理解されるべきだろうか。福本日南の思想の奇跡を辿った広瀬玲子は、アジア・太平洋が本格的な帝国主義の時代に突入していく中で、日南が従来の「興亜」思想を後退させ、西欧流の帝国主義的マナーに従っていった過程を描き出している[28]。しかし既に論じたように、南進論者は多かれ少なかれ「興亜」的な発想を抱いていたが、現実の政策的判断は概ね「脱亜」的な国際認識に依拠してなされており、彼等の通商立国論は「帝国の時代」への無知ゆえではなく、そのような時代を生き抜く術として主張されていた。ゆえに「南伸」論から「南侵」論への変容は、単に「帝国の時代」への対応、それに伴う「脱亜」の過程として描かれるべきではないであろう[29]。

「南侵」論への変容の契機としては、「日清戦争による日本の台湾獲得、アジア大陸への武力的進出ということがなかったならば、日本の発展主義はかなり別の道を歩み」、「その主力が太平洋の方角に向」い、「その内容も、実際よりははるかに商業的、移民中心的、平和的なものとなった

かもしれぬ[30]」（入江昭）、「「海洋国家論」とは異なる南進論のもう一つの道筋を現出させる契機となったのは、日清戦争後の台湾領有（一八九五）であった」、「初の植民地を獲得したことによって」「南進論にある種の「国土」意識が纏わりつきだした[31]」（清水元）等の先行研究が指摘するように、日清戦争後の一連の領土拡張をより重視すべきだろう。領土の領有という体験が、南進論者が世界を見る眼に多大な変化を及ぼしたことは、先に挙げた志賀の論説「探検及び移住の方針」が、これからの探検は台湾のような「未だ文明人の入らざる所」を対象に行われるべきだと述べ、未だ列国の勢力下に入っていない「新版図」の候補地を捜し求めるようになったことによく表われている。領土拡張が望み得ないがゆえに逆説的にも四方の「海」に開けていた南進論者の視野は、皮肉にも領土を手にしたそのことによって、東アジアの勢力圏へと狭まっていった。

しかし世紀転換期の一連の領土拡張が、「南侵」論への変容の重要な契機となったのだとしても、考えなくてはならないのは、「海」に開けた通商立国の可能性を自覚し、日本の発展にとって領土拡張は必要ないとまで主張していた彼等が、領土拡張という事実を特別な思想的葛藤もなく受け入れ、以後「国土」意識を肥大化させていった事実の意味である。この事実は、「南侵」論への変容が日清戦争以後の領土獲得によって突如起こったものではなく、そもそも明治期南進論の論理に内在していた契機だったことを示唆する。以下で見るように、彼等は四方の「海」に開けた通商立国の可能性によって、未だ手にしていない領土、手にはいりそうもない領土の価値を相対化することはしても、領土拡張自体の意義を問い直すことはしなかった。その彼等が、成功裏に手中に収めることができた領土の価値を問うことをしなかったのは当然であったといえる。

二　内在的契機

心情としてのアジア主義と政策としての欧米協調主義を峻別し、自国の脆弱性や他列強の権益への配慮から自制的な対外政策を主張した明治期の南進論は、アジア主義者に見られる独善的な膨張論と比較して、相対的に「平和的」であった。しかし冷静な国際環境の洞察は、列国との関係を大きく乱す形での領土拡張を戒めるものではあっても、領土拡張自体を否定するものではない。榎本武揚設立の殖民協会趣意書が「兵力を以て人の国を略し地を掠むるが如きは以て我国の殖民兵略と為すべきに非らずと雖も海外に適当の地を卜し平和の手段に由て之を行ふに於ては何の妨か之れあらん」と謳っていたように[32]、明治期南進論者における「平和の手段に由」る発展の選択は、「兵力を以て人

の国を略し地を掠むる」ことを原理的に否認するがゆえの積極的選択というより、既に欧米列強の勢力が扶植された地域に武力で割り込むようなことは不可能と判断するがゆえの消極的選択だった。服部徹は、拓殖殖民の方法として「新地発見策」「侵食略奪策」「通商貿易策」の三つを挙げ、もはや世界に「新地」は残されておらず、また「国際公法のある限りは、妄りに平地に風波を起す可きに非らざる」ため、列国は従来の「侵略略奪」を改めて「平和通商策」へと移行しつつあると見て、「平和通商策」を「最も平和の今日に適せる良策」と断定した。しかしその服部も、欧米列強は表面上「平和通商策」をとり行いながら「其実第二策（侵食略奪策）に垂涎」している、「公然之れ（侵食略奪策）を行ふ能はざるを以て其気煙は消滅せるが如しと雖も決して然らず」と念を押していた。[33] 服部においても、「平和通商策」の選択は、「侵略略奪策」の遂行が困難になっている現状での消極的な選択であり、さらに列強が「陽に平和策を取るも、陰には常に此策（侵食略奪策）を思ふて忘れず」と強調されるのだった。先に日南が「海図恢廓論」で海洋国家日本の洋々たる未来を語っているのを見たが、日南は次のように語ってもいる。「植民は現世紀及び後世紀に渉り世界各国の争ひて取る所、吾輩の亦夙に企望し主張する所、而るに過去三世紀間閉港鎖国して以て世界と離隔したりし我国の為めに今日は殆ど弾丸黒子の余地だも遺さず、若し我にして堅確の意見と不撓の精神とを以て念々常に之を求めて息まずんば未だ其の庶幾す可からざるを患へずと雖も、今ま我故なく他人の封土に入り、突然之を占領して我植民地となすを得ざるや固より是れ言を待たず、磋乎我れ之れを内に開かん歟、其土固より限りありて、限りなきの需を盈たすを得ず、之を外に拓かん歟、遺地の収む可きなく、邦土の侵す可きなし、然れば則ち終に以て已む可き歟、曰く否な、我応に大に版図を海面に拓くべきなり」[34]（傍点筆者）。日南にとって海洋国家の道は、植民地の拡張や内地開発といった他の手段による発展が八方塞がりの現状での消極的な選択だった。四方に広がる「海」の可能性を、「版図を海面に拓く可し」と言い表す日南は、領土拡張への欲求から抜け出せてはいない。また、「我低廉なる労力を輸出して海外の土地或は資本と結合せしめ」れば、「版図を拡張したると同一なる効用」[35]を期待できるとした恒屋盛服の経済進出論にも同様の心情が認められよう。

明治期南進論者は、「欧州の強国とても皆其版図は頗ぶる広く、尚ほ之を拡げんとて汲々尽力するは今日の勢ひ」といった情勢を横目に、「我邦の如きも、世界に立ちて立派に一面の体面を維持せんが為めには、到底其版図を広くするの謀なかるべからず」[36]という焦燥感に苛みながら、列

国に伍して海外発展をするにはまず国力を培養しなければならない、当面はできるだけ列国の権益と衝突しない発展方法を選ぶべきだという現実的判断を下すがゆえに通商立国を主張したのであり、「海」に開けた通商立国の可能性によって、領土拡張の意義自体を根本的に問うたわけではなかった。彼等にとって経済的進出は、西欧と伍してパワー・ポリティクスを展開できない地域での二次的手段でしかなかったのである。彼等の論理には、領土拡張的な「北進」に対し、北方の現状維持と南方への経済的進出を説く「北守南進」を提起する契機は存在するが、「北捨南進」の契機は存在しない。彼等がついぞ「北捨」の問題を提起することなく、領土拡張的な「北進」への批判意識を欠いた「南北併進論」へと変容を遂げたのは、そもそもその論理に内包していた危険であった。

先のシーリーの言葉を借りれば、明治期南進論者は「国家を持っては行かない」移住を主体的に選択したわけではなく、「持って行きたかった」にもかかわらず、「持って行けなかった」のだった。ゆえに移住の際「国家を持って行ける」のならそれを否定する必要はなかった。二十世紀に入ると福本日南は「唯国民が移住する――人民が移って行くことばかりでなく、ドウしても一つ是れに伴ふ所の国家の拡大といふことでなければならぬ」、「此国家の拡大といふことを日本人若くは日本の政府が忽せにしたら、此植民は甚だ不結果に終るだらう」と、「国家の拡大」を伴わない移民に明確に否定的な見解を表明するようになる。[37]

また南進論者において「国家を持っては行かない」移住は、そのような移住ならば日本にも可能であるという消極的判断の下になされているのみで、うまくいかないのであればそのような移住を強いて選ぶ必然性はない。一九〇〇年代にいよいよ深刻な問題となった白人国家による移民排斥は、「国家を持っては行かない」発展方法であれば格別な障害にぶつかることもないという明治期南進論者の前提に大きな打撃を与え、彼等の潜在的な領土拡張意識を高めることになった。日南は移民排斥の原因を「日本国家の力を少しも及ぼされぬ」ことに求め、今後の植民は「成るたけ日本本国の勢力の及ぼし易い所」、具体的には中国、朝鮮や満州を重点的になされるべきだと主張するようになった。[38] 志賀重昂も白人国家による日本人移民排斥について、「自ら領土を有せずして他国の領土に移住出稼する者は、何分にも客分として主人公のある土地に行くものなれば、其の運命は畢竟以上の如くなるのである」との見解を表明した。以前志賀は、太平洋を万国の共有地と見なし、その開発の進展を関係国すべてに利益を均露するものと歓迎していた。しかしここで志賀は、「日本が開国の遅いために

既に植民政略に後れを取たのは致し方がないとしても、列国が海洋を開拓するの気運に早く気付いた以上は、今回こそは断じて後れを取ってはならぬ」と、海洋開拓の拠点・海洋電線の中継地とするために「大小の島々は固より、たとへ珊瑚礁にても、今日に於て占領」せよと焦燥感を露にするようになる。さらに志賀は、「他人の国を奪ひ、異人種を亡ぼすの不徳義なることは、西洋人とても百も二百も承知して居る」、「仮し徳義論を別とするも、自分の生まれたる本国にて十二分に衣食し得ることが出来るなれば、誰れか好みて父母の国を離れ風土を異にし、人種言語を異にし、待つものは疫病に非ずんば虐殺なるが如き異邦土に移住する者あらんや。併し乍らこれを実行するのは、以上の如き已むを得ざることの結果である」と、侵略政策を是認するに到った。[39]

おわりに——明治期南進論・「平和的」発展と「帝国主義」のあいだ

当時、「帝国主義」という言葉が主として政治的軍事的な領土拡張政策を意味していたことを鑑みれば、[40]明治期南進論を「帝国主義者」とすることは妥当でない。しかし逆に言えば、赤裸々な領土拡張政策を唱えなかったからといって即「平和的」発展というわけではない。明治期南進論者が経済手段を主軸とする対外進出を説いたことを専ら肯定的に評価する入江昭や矢野暢の見解に対し、広瀬玲子は次のような本質的疑義を投げかける。明治期南進論者は軍事進出には異を唱えたが経済進出を推し進める政策には無条件に賛同しており、帝国主義の経済的側面に対する考察を欠いていた。彼らの主張はむしろ「経済侵略主義」と捉えられるべきではないか。[41]一方で「平和的発展主義」と肯定的に評価され、他方で「経済侵略主義」と難じられる、このような明治期南進論評価の振幅の大きさの原因の一つは、「帝国主義」という言葉がこの時代においても、現代においても、論者ごとに定義が存在する多義的な言葉であることに存在する。[42]帝国主義を狭義に定義し、武断的拡張主義のみをそう呼ぶのであれば、明治期南進論は「非」帝国主義者であった。しかし既に考察したように、彼等はメンタリティとしては武断的拡張主義の容認に立っており、「反」帝国主義者であったとはいえない。入江昭は、近代日本史に連綿と「平和的発展主義」が存在したことの例証として、日本が帝国主義国としての道を本格的に歩みだしてからも「武断的領土拡張政策と同時に、平和的発展論も引き続き論じられた」ことを強調し、この事実を「平和的発展主義は日本の対外関係の底流として、領土拡張主義に

かかわりなく存在していた」ことの証明と見なした。[43] しかし裏面から見れば、平和的膨張が「領土拡張主義にかかわりなく」主張され続けたことは、その主張が領土拡張主義への根本的な批判意識を伴うものではなかった、そうであるがゆえに領土拡張と平行して遂行されることに何等矛盾がなかったことを示しているともいえるだろう。

さらに広瀬のように、帝国主義を現地住民への直接・間接的な圧迫として広義に定義した場合、明治期南進論者はどう評価されるだろうか。確かに明治期南進論は露骨な侵略政策を企図することはなかった。しかし彼等の経済的進出論には「平和的」発展論とするには違和感を感ぜざるを得ない要素が散在している。例えば菅沼貞風は外国貿易を「働掛の貿易」と「受身の貿易」の二種類に区別し、外国から商人がやってくるのを待っているだけの「受身の貿易」では利益は上がらない、富源を外に求める「働掛の貿易」が是非とも必要だとして、自ら産地に出向き、販路を開拓し、仲介貿易の利益を「専占」する積極的経済進出を唱導した。そして「吾人は敢て彼の欧洲各大国の如く他人の国土を奪掠して自己の財嚢を充たさんと欲するものにあらざれども苟も商業を振起せんと欲するには其進路に当れる障碍を切開くべき勇気なかるべからざる」と高唱した。[44] 「働掛の貿易」を声高に求める菅沼の視野には、競争相手である欧米諸国は映っていても、「働掛」られる現地の人々は、全く捨象されている。「商工業の平和的拡張は、生民生活の権利を充実する所以にして、何処に之を求むるも、毫も人の行為たるを失はず」、「今ま夫れ支那に於ては、開発す可きの鉱山、鉄道、海路、運河、各種の工業及貿易、枚挙するに遑あらず、而して、文化の程度に於て今日の支那人の未だ応ずる能はざる所、我より進みて之を求め之を開く、我に利ありて又彼に益あり」[45] という日南の主張には、武力さえ用いないのであれば、いかなる手段をも「平和」の名の下に許容する放縦さ、開発能力のない現地住民に代わって開発を請け負ってやることは相手の利益にもなるのだから、許されないはずはないと信じて疑わない独善が窺える。戦前日本で影響力を振るったイデオローグ徳富蘇峰は、一八九九年の論説「帝国主義の真意」で、帝国主義は「対外積極政策の別名」であり、「侵略主義」「排他主義」「独占主義」「武権独尊主義」では決してない、「帝国主義は平和的膨張主義也」と定義した。[46] しかし蘇峰の主張する「平和的膨張」は、「侵略主義」「排他主義」「独占主義」「武権独尊主義」ではないという形で消極的に定義されたものに過ぎない。明治期南進論者は、蘇峰ほどの大胆さで「帝国主義は平和的膨張主義也」と開き直ることはしなかったが、彼らの「平和的膨張主義」も蘇峰と同じく消極

的に定義されたものに過ぎず、彼らは蘇峰の定義では紛れもなく「帝国主義」者であった。

遠藤泰生は南進論者の意識には、太平洋へ参入してくる欧米は存在しても、太平洋世界の住民は「不在」であり、この「他者の不在」と言うべきメンタリティが、日本が同地に自国を一方的に利する相手のみを探し求めた根源にあったと指摘している。[47] 先に服部徹が「通商貿易策」を「最も平和の今日に適せる良策」と位置づけたのを見たが、その別名「一名平和策」の内実は「先ず通商貿易の途を開き、或は有力なる商売を移して商権を握らしめ、或は有力なる農工を移して土地所有の権を持たしめ、特有物産の製造権を取らしめ、遂に其内政を動かすに至るべし」、「既に貿易の権を掌握し、内政を左右するに至らば、策の正に成るものなり」[48]といった、現地の人々の意識を全く介在させない一方的な進出論――確かに非軍事的手段という一点では「平和的」であるが――であった。現地住民は「利を以て導き、徳を以て懐け、大に其人心を収攬」する無名の客体として立ち現われるのみで、独自の利害や価値観、ポリティクスを持つ自律的な主体として立ち上げられることはない。この「他者の不在」の傾向は、その後の南進論において強まることはあっても、克服されることはなかった。特に南洋の資源が関心の対象として浮上すると、ますます同地への関心は「いかに日本のために利用すべきか」という利己的・一方的なものとなり、南進論者の描く南洋像はいよいよ無機的になっていった。もう少し時代が下った時期の代表的南進論者竹越与三郎は、「欧州人がマレーの海を探るもの数百年なるも、其大宝庫たるは、昔日と変化なく、これを開くものを待ちつゝあり。日本国民若し良く此大宝庫を開くを得ば、大国民の宏業茲に完成すと云ふを得ん」[49]と朗々と謳いあげた。副島八十六はもっと端的に「吾人が印度南洋を云々するは固より主として其の富源の多大なるが為めなり。而して其の多大なる富源を如何に我国に利用すべきかは今後に於ける重要問題たるや論なし」[50]と表明した。昭和に遂行された国策的南進が第一に南洋の資源を求めたものであったことを想起したとき、ここには根が深い問題が存在するといえる。現地の人々を「智識低級にして生業亦た見るべきものなしと雖ども、彼等は我が国民に親しむの情最も厚く、我が国民が殖産に、工業に、来つて其の事業に活躍するを喜び、其用を為すを楽みつゝあること殆んど尋常に非ず」[51]というように、日本人の経済的進出にただ賛同する存在――このような記述の背景に同地への経済進出を正当化する意図が存在するのは明白である――として描く傾向は、時代を下るごとにますます強まっていった。

太平洋戦争の敗戦により、日本は東南アジア政策の根本的清算を迫られた。現代の私達はもはや東南アジアに対し、昭和期のような領土的野心を抱くことはない。しかし専ら東南アジアを自己の利益のために利用する地――経済投資の場、輸出市場の場、資源獲得の場と見る発想に関してはどうだろうか。「北人南物」――南には「物」はあるが、それを開発・利用すべき「人」は北にしかいない――といった無機的な南洋観から、果たして私達は自由であろうか。「帝国の時代」になお、「非」帝国主義的な発展を模索した明治期南進論は、その問題点や限界も含め、海外発展がもはや常態となり、その意義を問うことを忘れた現代の私達に多くの示唆を投げかけている。

注

(1) 入江昭「平和的発展主義と日本」『中央公論』八四巻一〇号、一九六九年、七四―九四頁。

(2) 本庄営治郎著『先覚者の南方経営』日本放送出版協会、一九四二年。田中末広編『先覚諸家南方建設論選集』帝国書院、一九四三年。花園兼定著『南進論の先駆者菅沼貞風』日本放送出版協会、一九四二年。

(3) 矢野暢「近代日本における南進の論理」『中央公論』八九巻一号、一九六九年、七五頁。

(4) 矢野暢『「南進」の系譜』中央公論社、一九七五年。同『日本の南洋史観』中央公論社、一九七九年。矢野が当時において数少ない先行研究として挙げたのは、入江寅次の『明治南進史稿』(井田書店、一九四三年)と『邦人海外発展史』(移民問題研究会、一九三八年)であった。

(5) 矢野、前掲『「南進」の系譜』、六四―六五頁。

(6) 矢野暢「近代日本の南方関与」、同編『東南アジア学一〇・東南アジアと日本』弘文堂、一九九一年、六頁。

(7) 矢野、前掲『日本の南洋史観』、六〇―六二頁。

(8) 一般に南進論は、朝鮮・中国への進出を重視する北進論に対し、「北」に関しては「守」の立場をとり、「南」への進出を説いた対外思想とされる。しかし後述するように、南進論者は特に「南」のみを目指していたわけではなく、その視野は四方の「海」を介して世界大に向けられており、「大陸国家論」としての北進論に対する「海洋立国論」と捉える方が適切であると思われる。「海」の思想として南進論を捉える視角は、矢野によって早い段階から提起されていたが(矢野、前掲『「南進」の系譜』、五四頁)、明確にこの視座を打ち出したのは後に見る清水元の一連の著作である。

(9) 矢野、前掲『「南進」の系譜』、五三頁。

(10) 矢野が挙げる代表的南進論者とその著作は次の通りである。志賀重昂『南洋時事』(一八八七)、服部徹『日本之

南洋』（一八八八）、同『南洋策――一名南洋貿易及殖民』（一八九一）、菅沼貞風『新日本の図南の夢』（一八八八）、鈴木経勲『南洋探検実記』（一八九二）『南島巡航記』『南洋風物誌』（一八九三）、田口卯吉「南洋経略論」（一八九〇）、稲垣満次郎『東方策』（一八九一）『東方策結論草案』（一八九二）、竹越与三郎『南国記』（一九一〇）。

(11) 近年の重要な先行研究としては清水元と広瀬玲子の業績が挙げられる。清水元「明治中期の「南進論」と「環太平洋」構想の原型――志賀重昂の『南洋時事』をめぐって」(I)(II)、『アジア経済』三三巻九号、一九九一年、二―二〇頁、三二巻一〇号、一九九一年、二七―四四頁。広瀬玲子『国粋主義者の国際認識と国家構想――福本日南を中心として』芙蓉書房出版、二〇〇四年。清水は明治期南進論者を、①矢野龍渓ら福沢諭吉に連なる立憲改進党系の論者、②恒屋盛服や服部徹ら榎本武揚周辺の人脈、③杉浦重剛や志賀重昂ら政教社系グループ、その他菅沼貞風、稲垣満次郎ら平戸グループに整理している。本論文では紙幅の都合により清水が挙げる①の南進論者（矢野龍渓『浮城物語』や須藤南翠『旭章旗』などその多くが政治小説であった）を考察対象に含めることができなかった。今後の課題としたい。

(12) 森久男「書評 矢野暢著『日本の南洋史観』」『アジア経済』二〇巻一一号、一九七九年、九〇―九三頁。

(13) 矢野、前掲『日本の南洋史観』、六〇―六二頁、七一―七二頁。

(14) 明治期南進論者の脱亜的志向を明確に指摘したのは、清水元である。清水は明治期南進論の特徴として、アジア主義的連帯の否定、国力に対するリアルな認識、欧米帝国主義の権益への配慮などを挙げ、アジア主義者に比して抑制的な対外政策を志向する傾向にあったと指摘している（清水、前掲「明治中期の「南進論」と「環太平洋」構想の原型」(I)、二―三頁）。矢野は明治期南進論の脱亜的志向には同意しているが、明治期南進論が同時代の他の対外思想に比して平和的なものとなった要因を主として「善意の思想」、「在野の思想」であったことに求めており、脱亜的な醒めた国際認識が、逆説的に明治期南進論の「平和性」を生み出したという見方には与していない。

(15) 菅沼貞風『新日本の図南の夢』岩波書店、一九四二年、二一―三九頁。菅沼は慶応元（一八六五）年肥前平戸に生まれ、明治二十二（一八八九）年に福本日南を誘いマニラに渡り南洋調査に従事したが、同地で急死。『新日本図南の夢』は明治二十一年に書き上げられたものだが、世に出たのは『大日本商業史』が岩波書店から刊行された昭和十五年であった。昭和に国策的南進が遂行される中で、明治期南進論者が「先駆者」として「発見」されていった経緯を端的に示す事例であろう。

(16) 菅沼にも、高らかな人種闘争論とは裏腹に、当面の間は白人国家と直接干戈を交える事態を避けようとする志向が見られる。菅沼が太平洋諸島に目をつけたのは、「是等の土地は皆海中にあれば既に之を略取するの後は外国との交渉を生ずること少なく実に取るに易くして亦守るに易き」と見たからであったし、「暹羅を助けて英と一戦し、「マラッカ」の半島を復して新嘉坡の狭門を扼し、然して後朝鮮を助けて露と一戦し、満州の全域を復して浦塩斯徳、「ニコライスク」、樺太、東察加の嶮要を占め」るという大胆な計略の背景には、「欧州の密雲将に雨らんとするや近し矣」、「彼等が力量の互消し尽くるの日にしあれば、吾人起て海外の新版図を収むるも彼安んぞ之を争はん」という冷静な情勢判断が存在した。菅沼の南進論の先行研究として、有賀定彦「明治期における「南進」論の一系譜――菅沼貞風『新日本の図南の夢』をめぐって」『東南アジア研究年報』二六号、一九八四年、七五―八九頁。

(17) 志賀重昂『南洋時事』(一八八七)、志賀冨士男編『志賀重昂全集』第三巻、志賀重昂全集刊行会、一九二七年、七頁。志賀重昂は文久三(一八八七)年岡崎に生まれ、近藤真琴の攻玉舎、その後札幌農学校で学んだ。『南洋時事』は英国による巨文島占拠の報を聞き、海軍練習艦「筑波」に便乗してカロリン、オーストラリア、ニュージーランド、フィジー、ハワイなどの島々を旅行した際の旅行記。

(18) 南進論の特色として「脱亜主義」を指摘する清水は、『南洋時事』の日中連盟の主張について、「中国との連盟による欧米へのアジア主義的対抗などでは決してなく、イギリスとの協調を基軸として、一方で中国との友好関係をできるだけ保持しようとしたものにすぎない」と評価している。清水、前掲「明治中期の「南進論」と「環太平洋」構想の原型」(Ⅱ)、二九―三一頁。

(19) 入江昭『日本の外交』中央公論社、一九六六年。

(20) 清水、前掲「明治中期の「南進論」と「環太平洋」構想の原型」(Ⅰ)、二頁。

(21) 志賀『南洋時事』、一一、二〇、一〇二―一〇三頁。

(22) 恒屋盛服『海外殖民論』博文堂、一八九一年、二―三頁。

(23) 清水靖久「二十世紀初頭日本の帝国主義論」『比較社会文化』六巻、二〇〇〇年、一―二頁。

(24) J. R. Seeley, *The Expansion of England: Two Courses of Lectures*, London: Macmillan, 1883, chapter 3. 邦訳シーレー著、古田保訳『英国発展史論』第一書房、一九四二年、第三章。

(25) 福本日南「海図恢廓論」(一)、『日本』一八九一年一二月二二日。福岡藩士の子として生まれた日南は一八九九年より『日本』の記者として活躍、同年菅沼貞風とともにフィリピン植民を志したが挫折。一八九一年には東邦協会

創設に尽力し、幹事に就任した。この論説は無署名だが、広瀬玲子が指摘するように、『日本』一八九二年一月六日号で日南自身が「海図恢廓論」を自身の著作として言及していることからも、内容からも、日南の論説と見てよいと思われる。広瀬、前掲書、三〇八頁。

(26) 志賀『南洋時事』、緒言。

(27) 志賀重昂「探検及び移住の方針」『太陽』一巻一〇号、一八九五年十月五日。

(28) 広瀬、前掲書、第五章。

(29) 本論文でも強調してきたように、明治期南進論は主観的にはアジア主義的感情を抱いても、現実的判断としては西欧列強との協調（少なくとも対立回避）を図るねじれた対外思想であり、どちらの面を強調するか、彼等が吐露するアジア主義的心情をどれほど現実的なものと見るか――実際に行動原理として働いているのか、「脱亜」的行動の正当化に使われているだけなのか――によって、彼らをアジア主義者と見るか、脱亜主義者と見るかに関して正反対の評価が生まれ得る。こういった曖昧さを鑑みても、「南侵」論への変容を「脱亜」の過程として説明することは不十分であるといえる。

(30) 入江、前掲論文、八〇頁。

(31) 清水元「アジア主義と南進」、大江志乃夫・浅田喬二他編『岩波講座・近代日本と植民地4――統合と支配の論理』岩波書店、一九九三年、九五頁。

(32) 『殖民協会報告』一号、一八九三年四月十五日。

(33) 服部徹『南洋策』村岡源馬刊、一八九一年、七七―八二頁。土佐士族であった服部は、榎本武揚の南進論への共鳴者であった依岡省三や横尾東作と親交が厚く、南洋探検や共同事業を行った。

(34) 福本日南「海図恢廓論」(二)、『日本』一八九一年一二月二四日。

(35) 恒屋、前掲書、六七頁。

(36) 杉浦重剛「東洋論策」（一八八六）、明治教育史研究会編『杉浦重剛全集』第二巻、杉浦重剛全集刊行会、一九八二年、五七頁。清水元は杉浦の主張が政教社グループの中でも「最も膨張主義的傾向の強い」ことを認めつつ、西欧列強との摩擦が少ない地域を進出先に挙げていることや朝鮮侵略に反対していることを挙げ、明治期南進論者としての特徴を具備していると見ている。清水、前掲「明治中期の「南進論」と「環太平洋」構想の原型」(I)、一四頁。それに対し、杉浦の対外論の侵略主義的、国権論的性質を強調したものに、天沼香「明治中期国粋主義者の移民観――政教社、杉浦重剛の移民論から」『東海女子大学紀要』六号、一九八六年、一九―三〇頁。

(37) 福本日南「帝国の前途」『東邦協会会報』七九号、一九〇一年三月二八日。

(38) 同上。
(39) 志賀重昂「水の経営」(一九〇三)、『志賀重昂全集』第一巻、九三―一〇一頁。
(40) 清水靖久、前掲論文、二頁。
(41) 広瀬玲子「国粋主義者の移民論・植民論覚え書き」『歴史評論』五一三号、一九九三年、三二―四一頁。「どのようなかたちであれ、人間が他者の土地(生活)に侵入するという行為は、それを受け入れる(受け入れさせられる)側に立てば、圧迫感を伴うことなしにはすまされ」ず、移民・植民のような営為に関してどこまでは「平和的」でどこまでが「侵略的」であると線引きすることはできないという広瀬の指摘は、非領土的・経済的発展を説いた明治期南進論の「平和性」をいかに評価するかに関する本質的な指摘を含んでいる。しかしすべての膨張は多かれ少なかれ「侵略的」であるという形で、「平和的」対外進出と「侵略的」対外進出の区別を無化してしまっては、南進論の「平和性」が、アジアに対する使命感を謳い、膨張政策を正当化したアジア主義や、露骨に軍事的・領土拡張的であった北進論に比しての相対的なものであったにせよ、それが全く評価できない。清水元が指摘するように、当時の日本にとって「問題は、膨張すべきか否かにあったのではなく、「どのように膨張すべきかということこそが問題だった」(清水、前掲「明治中期の「南進論」と「環太平洋」構想の原型」(I)、三頁)のであり、入江が明治期南進論を「平和的発展主義」と評価したのは、「国家集団というものが力によって支えられた組織体である以上、まったく力の背景のない発展などというものは定義できないかもしれない」と承知しつつも、あらゆる力の契機を即帝国主義とする見方を斥け、軍事的対外進出と「あからさまな軍事力を媒介としない海外進出」とを区別する相対的な眼差しからであった(入江、前掲論文、七五頁)。こうした入江の視座は依然有効性を失っていない。その上で、広瀬の指摘は、矢野・入江らによる明治期南進論の「再発見」以後の研究において、通商立国論=非領土的膨張論=平和的発展主義という等式が、深く問われることのないまま前提とされてきた経緯を考えて極めて重要なものである。
(42) 入江昭「帝国主義の修辞と実態」『中央公論』八四巻九号、一九六九年、一一〇―一二〇頁。
(43) 入江、前掲「平和的発展主義と日本」、八二頁。
(44) 菅沼貞風『大日本商業史 附平戸貿易史』東邦協会、一八九二年、三―四、六三三頁。
(45) 福本日南「東観小録」『日本人』〈第三次〉一〇八号、一九〇〇年二月五日。
(46) 徳富蘇峰「帝国主義の真意」『国民新聞』一八九九年三月二十四日。
(47) 遠藤泰生「太平洋世界の相互イメージ――十九世紀の

アメリカと日本における太平洋の表象」、遠藤・油井大三郎編『太平洋世界の中のアメリカ――対立から共生へ』彩流社、二〇〇四年、四一―四二頁。

(48) 服部、前掲書、八〇―八二頁。

(49) 竹越与三郎『南国記』(一九一〇)、日本評論社、一九四二年、一四五頁。

(50) 副島八十六『帝国南進策』、民友社、一九一六年、四三頁。

(51) 伊藤友治郎『南洋方面移植民に関する意見書』、一九二四年九月。伊藤は南洋拓殖協会の理事などを務めた。この意見書は政府の移民調査委員会設立に当たって提出された。

(東京大学大学院)